

皇居で見たこと、聞いたこと

～取材メモから～

フリー編集者 松永 努

1、はじめに

■見えないものを見つけて

私は皇室の専門家ではないので、これからお話しすることは皇室論ではなく、宮内庁を担当したころの取材メモをもとにしたささやかな体験記とお聞きください。

皇室に限らず、取材で見たり感じたりする現場と書いた記事は全然違います。いろいろな人に取材しても書く時にはフォーカスを絞るので、切り落とす部分の方がはるかに多いのです。取材相手の人とは雑談もたくさんして、面白い話も多いのですが、ほとんど記事になりません。今日の講演に備えて昔のメモを読み返していてつくづくそう思いました。

「見えないゴリラ」という実験の話を知ったことがあります。参加者は短い映像を見せられます。画面には白と黒のユニフォームのバスケット選手が何人かいて、白のユニフォームの選手が何回パスしたかを数えるように言われます。よく見ていれば正解するのは難しくありません。正解すると実験者が「ところでゴリラは見えましたか」と聞くのです。正解した人はポカンとしますが、映像をもう一度見ると確かにゴリラが選手たちの間を横切っている。白のユニフォームに注目するあまり、黒にまどわされまいとする意識が働き、黒のゴリラをも見逃してしまっていたのです。きょうのお話ではゴリラとはいかないまでも、通常の報道では見えないウサギかネズミぐらいを見ただけであれば幸いです。

2、宮内庁という世界

■巨大スクープのチャンス

私が皇室を担当したのは昭和62年から平成2年にかけてです。昭和天皇の亡くなる前後。バブル経済が絶頂に達し、冷戦が終結したころです。「文部省担当をやらせてほしい」と部長に言うと、彼は「文部省なんかに、死ぬ前に思い出せるような特ダネなんかないぞ。でも宮内庁には巨大スクープのチャンスがある。皇太子の結婚でも抜いて死ぬ時に思い出せ」と言いました。

「菊のカーテン」とよく言われますが、宮内庁は私にとって興味津々の話がいろいろ聞けるワンダーランドでした。少し前に東宮侍従になった40歳ぐらいのYさんとよく話し、お酒も飲みました。彼は外務省のキャリア官僚。さっぱりとした人で、私と同様、初めて見る御所の中の世界に好奇心をギラギラさせていました。「皇太子さまの隣に座り車に乗っていると『オレはいったい何をしてるんだ』と不思議でならない」「頭の中がひっくり返りそうだけど、書生ってこんなもんかとも思う」などと言っていました。

ここで念のために言っておきますが、きょうは当時の時制でお話しますので、「天皇皇后」と言えば今の「上皇ご夫妻」、「皇太子」は今の「天皇」を指します。

■美智子妃に「だれなんだ」

Yさんはとても書けないような皇室秘話をいろいろ教えてくれました。

「先輩から聞いた話ですが、以前、皇宮警察の人が内線ダイヤルを間違えて、美智子妃のところにかかってしまったんです。ご本人が出たのにその人は気づかず大声で『だれなんだ』と言ったらしい。その後がどうなったか恐れ多くて知りません」

「地方で天皇陛下や皇太子さまと同じ車に乗っていると、沿道の人『あっ、いるいる』という声がよく聞こえてきます。陛下や殿下はその声に喜ばれて手を振られていました」

■100グラム295円の肉で

「ダイエーで買った100グラム295円の肉で作ったローストビーフを、皇太子さまに食べていただきました。殿下は気に入って『両親にも食べさせてあげてください』と言いました。宮内庁で天皇や皇族の

料理を担当する大膳課の人が『肉は用意します』と言ったけれど、やはり 295 円の肉で作ってさしあげた。皇后さまは『おいしいですね。いずれ嫁にゆく清子（紀宮さま）にも持たせてやりたいのでレシピを下さい』とおっしゃり、さらにずっと後で『あの時のローストビーフはおいしかった』とほめてくださり感激しました」

■仕事熱心さにびっくり

Yさんは両陛下の仕事熱心さにびっくりしていました。

「陛下はヘラルド・トリビューンを読んでおられて、大統領の就任演説も全文を英文で読む。あんなの外務省でもだれも読んでいないのに」

「昭和天皇の大葬の礼の後、各国の王族を御所に招き茶会を開きました。両陛下は『この椅子はこうして並べた方がいい』などとおっしゃって自ら椅子や机を動かして準備していました。私は手伝いましたが、幹部はポカンと見ていました」

■司会者なしで勝手に演奏

両陛下や職員を交えた音楽会が御所で時々行われていました。Yさんは「私はピアノでバッハを弾きましたが途中でつかえてしまいました。最初に戻らないとできないので、3回繰り返して弾きました。皇太子さまは6、7回登場しアンサンブルで演奏しました」

音楽会には両陛下や殿下の知友の人たちが招かれました。午後5時ごろから9時ごろまで開かれ、食事も用意されています。司会者はいなくてそれぞれが勝手に演奏します。皇后さまは「この音楽会は終わった後にプログラムができるの」とおっしゃっていたそうです。Yさんはバッハでしくじった翌年、尺八に初挑戦して自作の「小切子節変奏曲」を披露しました。皇太子さまは「Yさんの尺八は首をふりませんね」と笑っておられました。

■職員を大事にする天皇家

Yさんは後日、宮内庁への出向を振り返り「天皇家は旧職員を大事にしてくれます。正月や誕生日は必ず呼んでもてなしてくださる。外務省はそんなことしてくれません。正月もお忙しいのに時間を割いてくださる。皇太子殿下が私の郷里にお出かけした時には、私の母まで御前に呼んでくださいました」と話していました。

3、天皇と短歌

■短歌は天皇制の本質

和歌というのは天皇家の伝統で、短歌は皇室の言語です。歌人の佐佐木幸綱さんも「短歌は天皇制の本質だ」と書いています。御所では毎年16回、「月次（つきなみ）の歌会」というのをやっていました。宮内庁職員が短冊に歌を書いて天皇に歌を詠進し、和綴じの小冊子にまとめて配布されます。

これとは別に、東宮御所で開かれる職員文化祭では、詠進された歌の作者名を伏せて印刷し、職員が人気投票をして、歌の先生が秀歌を選んでいました。作者が分からないから、必ずしも皇族のものが選ばれるとは限らず、ハプニングもあったそうです。ある職員は「先生が『これは殿下の作』と言ったのが実は侍医の作品で、先生は困惑していた」と話していました。

4、皇室祭祀

■神聖さを守る濃厚なタブー

ワンダーランドである宮内庁の最もミステリアスなゾーンは「皇室祭祀」です。一度だけ外から見せてもらったことがあるのですが、皇居の森の奥深くには「宮中三殿」というものがあります。明治21年の竣工で、土塀をめぐらした三殿は皇室の聖域です。入母屋造りの建物は、銅葺きの屋根も、檜の総白木も古びて黒ずんでいます。鬱蒼とした森の中にある、この古ぼけたお社にいます、自分が現代にいるのか、古代にいるのか、ここは東京の真ん中なのか山里なのか、不思議な気持ちになります。

建物の裏には候所といわれる場所があり、ここに数人の未婚の女性たちが住んでいます。賢所、皇霊殿に仕える「内掌典」です。宮中には内掌典以外にも不思議な名前の職種があります。私は見たことは



皇居内の宮中三殿。中央が皇祖天照大神の祀られている賢所
(出典・宮内庁ホームページ)

困を汚さないために新聞紙などを玄関まで敷いてもらい、その上を歩いて退出します。訃報を受けた時の服装はけがれているので処分します。

内掌典たちは毎日、そこにアマテラスオオミカミがおわすかのように、干物、昆布、清酒などを一品ずつ説明しながら供えます。最も重要な祭祀は11月23日夕から日付が変わるまで行われる新嘗祭。その年とれた新穀をアマテラスオオミカミなどに供え、天皇自ら口にするとされます。村上重良さんの著書「天皇の祭祀」からの抜き書きを紹介します。

■「女帝は例外的な存在」

「本来の新嘗祭は、穀物の霊と王が一体化する儀礼であったのであろう。穀霊は、一般に生産する力、生殖する力を備えた女性の霊格とされるから、新嘗祭の祭主をつとめることをもって最も重要な宗教的機能とする天皇は、終始、男帝を原則とし、女帝は例外的な存在にとどまったのであろう」。とてもミステリアスな言葉です。

掌典や内掌典は、憲法の政教分離原則に配慮して天皇の私的使用人ですが、公務員である侍従も祭祀には関わります。かつて宮内庁に出向したことがある中央官庁の職員は「装束を着て、外廊下でじっとはいつくばりながら、これは公務員の仕事だろうかと考えた。宮内庁へまた行けと言われては行くがおまつり（祭祀）だけは勘弁してほしい」と話していました。

5、皇族の会見で聞いてみた

■「稲生はどうした？」

宮内庁は地下鉄の二重橋駅で降りて、玉砂利の皇居前広場を横断し、坂下門を入った先にあります。庁舎は1935年（昭和10年）に建設されました。地下には職員食堂があり、栃木県にある御料牧場の牛乳を何も書いてない瓶に入れて売っていました。

記者クラブには長老の記者が数人いました。時事通信は稲生さんという長老がいて、白髪をいつもきれいにとかして、新参の皇宮警察の門衛は侍従だと思って敬礼したそうです。昭和天皇がお元気なころ毎夏、那須の御用邸に行かれ、庭で非公式の記者会見が開かれていました。ある夏、稲生さんが夏風邪をひいて出られなかった時、昭和天皇が「稲生はどうした」とおっしゃったそうです。それは彼の伝説となり、会社の飲み会で稲生さんが遅れると「稲生はどうした」というのが流行ったとか。

■皇太子をたぶらかす？

当時の女性記者に数年前に会った時、宮内庁時代の秘話を明かしてくれました。「皇太子さまがまだ独身で、地方におでかけになった時、そっと近寄り『殿下、京都の嵐山にある湯豆腐の美味しいお店を知っているんです。ご一緒させていただきませんか』と言ったんです。しばらくして東宮職から呼び出され『殿下をたぶらかさないでください。純粋なんですから』と言われました。たぶらかすなんてひど

い。私は記者として殿下の生の声をききたかっただけなのに」と怒っていました。私は「嵐山の湯豆腐が実現していたら映画の『ローマの休日』のようになっていたんじゃない」と茶々を入れましたが、皇太子との接点を作りたいという彼女の心境は痛いように分かります。

■ルートづくりに躍起

当時、宮内記者会には「正田」という名の、美智子さまの親戚筋にあたる記者や、大物政治家の血縁者もいました。皇太子の結婚をこういうルートのある人に抜かれるのではないかと思うと、いたたまれません。自分には何もない。ルートをつくらうと思うのは当然です。私は高円宮憲仁（のりひと）殿下にアプローチしていました。殿下は国際交流基金に一般職員として勤務しており、電話をすれば本人が出て、時間があればいつも会ってくれました。殿下に一層近づくために、社会部長と対談してもらおうと考え、稲生さんに仲介してもらって赤坂プリンスホテルでの対談が実現しました。無事に終わって雑談になり、酔った社会部長が「トルコなんかに行きたいと思いませんか」と言いました。エルドアン大統領のトルコではなく、当時その名前と呼ばれていた別の場所を指していたと思います。それを察した殿下は「お金がもったいないですしね」といなされました。

■込められた陛下の意思

宮内庁の総務課長は後に警視総監になった前田健治さんでした。平成元年の8月4日に天皇皇后の即位会見があり、その時幹事だった私は事前に前田総務課長のところへ行きました。当時、昭和天皇の戦争責任について発言した長崎市長が狙撃されるという事件があり、天皇制の是非や言論の自由が論議になっていました。宮内記者会の出した事前質問にも「言論の自由についてのお考えをお聞かせください」というのがありました。前田さんに「この質問に対する回答はどんな感じになりますか」と聞くと、「お答えは『言論の自由は大切です』という感じになると思いますよ」と言い、さらに「でも松永さんがさらにお聞きになればもっと話されるかもしれませんよ」と続けたのです。前田さんは会見に関し、両陛下と打合せをしている可能性があり、前田さんの言葉には陛下の意思を感じました。

■天皇制是非論議を認める

会見当日、くだんの質問に対し陛下は「言論の自由が保たれるということは、民主主義の基礎であり大変大切なこととっております」とお答えになりました。そこで私は手を挙げ、「いまおっしゃった言論の自由の中には、天皇の戦争責任や天皇制の是非に関する論議も含まれているのでしょうか」と聞くと、陛下は「そういうものも含まれております」とおっしゃったのです。

天皇として初めて、天皇制是非論議を認めたこのお答えは翌日の各紙の見出しになりました。ノンフィクション作家の保坂正康さんは、陛下が即位会見で戦争責任や天皇制の是非を含めた言論の自由を認めたことについて「陛下は天皇のあり方を革命的といえるほど変えてきたが、この時の所信を忠実に歩んできたといえる」としております。

6、美智子皇后という人

■心打つ力強い自己表現

美智子さまは戦後皇室のポピュラリティーを築き上げられた方だと思います。戦後日本の代表的人物は田中角栄、ご当地佐倉の長嶋選手、そして美智子さまだと思います。にこやかな外見とは違った厳しい面もあり、宮内庁幹部は「お供をしていると、強い口調でご指示をされたり、急に高い声をあげられたりすることもある。人前では抑えておられるが癪気（かんき）もある方だ」と話していました。

皇室のメンバーで美智子さまほど自己表現をされた方はいないと思います。児童文学に関するご講演の中では、古代神話にある、日本武尊を救うために海に身を投じたお妃の「愛と犠牲」の物語に、「現代につながる象徴性」を読み取っています。美智子妃の苦難については週刊誌や本がさまざまに綴っていますが、ご本人の文章にはそういうものが足元にも及ばないような力があるように思います。

美智子さまは次のような歌を詠んでいます。

～かの時に我がとらざりし分去(わかさ)れの片への道はいつこ行きけむ～

■三島由紀夫とお見合い？

この歌は、民間から皇室に嫁いだご自身について率直にうたいあげています。私はこの歌に接すると、三島由紀夫と美智子さまがお見合いをしたという未確認情報を思い出します。元毎日新聞記者の徳岡孝夫さんは、著書「五衰の人—三島由紀夫私記—」の中で、三島から直接、驚くべき告白を聞いたと書いています。当時、ノーベル賞シーズンになると昨今の村上春樹のように、三島は取材の対象になっていました。それを避けるためタイに滞在していて、バンコク特派員だった徳岡さんと交流を持ちました。ホテルのプールサイドで三島は「ぼくは××子さんと見合いをしたことがあるんです」と言ったそうです。三島はさらに「と言ってもね、正式な見合いではなかった。まともらなくてもどちらにも疵（きず）がつかないよう、歌舞伎座で双方とも家族（それとも介添え役だったか？）同伴で芝居を見て、食事をした。それだけでした」と続けました。徳岡さんは「むろん三島さんが口にした女性の名は、極めてやんごとなきあたりに嫁がれた方のそれだった」と書いています。

■「テニスコートの恋」ではなく

皇太子の音楽仲間でコンピューター会社の社長のKさんは、頻りに皇太子を自宅に招き、御所にも行って両陛下ともよく話していました。そのKさんはある時、皇后さまと話していて、ご自身の結婚について決断したきっかけとなった出来事を直接聞いたそうです。

皇后さまは父親の正田英三郎氏について、「父は忙しく、また大層無口な人でした」と回想したことがあります。その英三郎氏が「この結婚を断るのなら、自分は会社の経営も含めて一切から身を引く」と彼女に言い、それで決心したというのです。Kさんは「結婚はテニスコートの恋ではなくて仕組まれたものだった。しかしその後2人の間には恋愛が生まれた」と言っていました。

■おそば屋さんの天井が...

別の時、Kさんが御所で皇后さまと話していると、彼女は「おそばやさんの天井がなつかしい」とおっしゃったそうです。Kさんは「陛下はこれまで、市井のそば屋で天井を食べたことがないから、このような思いはないかもしれないが、一般人から皇族入りした皇后さまにはそば屋の天井がノスタルジーとしてある。そしてそれはもう二度と味わえないものなんだ」としみじみと思ったそうです。

皇族は孤独で自由がありません。Kさんが電話で皇太子と話していて「あすは朝から会議です」と言うと、殿下はぽつりと「Kさんは毎日行くところがあっていいですね」とおっしゃったそうです。学習院時代の皇太子の同級生の一人は、同僚の記者にこう話しました。「彼は人の悪口を決して言いません。バランス感覚の優れた行き届いた人です。こういう立場に生まれたことに悩みや苦しさはあるのですが、一切口にしたことはありません。悩みを打ち明けたり女性のことで相談したりする相手は学友の中には一人もいません。彼を見ていると普通の市民に生まれてつくづくよかったと思います」

7、困難に満ちた皇族の結婚

■「キッコちゃん」は早いうちから

皇族の不自由さは、これからお話する「困難な結婚」につながります。「キッコちゃん」という名前は随分早いうちから聞いていました。側近は「礼宮さんの彼女です」と話していました。川島紀子さんの名前は週刊誌にも出たことはありませんでしたが「彼女との結婚をやめさせるのは、結婚させる以上にスキャンダルになります」というので、血眼になって写真を集め、友だちにエピソードを聞いて回りました。そして予定原稿の分厚い束ができました。

その後、側近から重大な話を聞きました。平成元年6月ごろのことです。天皇陛下の「ともしび」という歌集の英訳版の作成の仕事をしていたこの人は、「陛下がふと『礼宮の納采は喪明けでなければならないが、皇室会議は喪中でもあると思う』とおっしゃいました」と言ったのです。この年は1月に昭和天皇が亡くなり喪中でしたから、慶事である結婚はありえないと思われていましたが、陛下の一言は「喪中でも皇室会議など結婚の準備手続きはありうる」というものです。さらにこの側近は言いました。「来月、皇室会議のメンバーの欠員を補充する人事があります。私は礼宮さまのご結婚が動き始めるということだと思います」と。

■裏取れず朝日に抜かれる

私は必死で裏をとりに行きましたが、宮内庁や侍従に当たっても否定しまくられました。こんなにつらいことはありません。打たなければいけない巨大な話があるのに、金縛りにあったように一步も前に動けない。間違っただけで自分がクビになるどころの話ではない。焼けた鉄の棒を飲まされている思いでした。弱い人間はこういう時、逃げを打ちます。「陛下は観測気球として、側近に喪中の皇室会議のことを話されただけで、その後、立ち消えになったのではないか」。自分で勝手に解釈するほど危険なことはありません。結局、朝日新聞に抜かれてしまいました。朝日は川島家に当たって、一家が御所にご挨拶にいったタイミングで打ちました。

■紀子さんに独占インタビュー

当社は事前に紀子さんの独占インタビューをしており、これを配信しました。当社のカメラマンのH君という後輩が、学生時代に「青年の船」に乗った時、紀子さまもいたという話を聞きました。礼宮さまとの結婚が内定する前、彼が「今度、青年の船の同窓会がある」と言ってきたので、「一番早く行って紀子さんの隣の席をキープしろ。質問を渡すから、その答えを覚えてトイレの中でメモしてきてくれ」と頼みました。

当日、H君は期待に応じて予定した質問をしてくれました。最後に「好きな人がいますか？」と質問すると、紀子さんは「心に決めた人がいます」と答えました。空気が張り詰めたままだったH君は「あやちゃんかな」と茶化しました。紀子さんは笑って「違うかもしれないわよ」と。場の雰囲気はほぐれました。H君の報告を聞き、「見出しができたな。この独占インタビューは結婚がオープンになった日に使おう」と思いました。

■曾祖父の経歴めぐり立ち消え

皇太子の結婚は最大の取材テーマでした。昭和天皇が闘病中の昭和63年11月15日の午後11時ごろ、当時皇太子だった明仁殿下からある令嬢のお父さんに電話が入りました。「昭和天皇の病状が厳しく、意識のあるうちに浩宮の結婚を決めたい」。それは結婚の申し出の電話で、2人を会わせたいという話でした。翌日令嬢と父親は御所に行き、浩宮さまに会います。東宮御用地の鮫が淵門から2人は車で入り、門では「昭和天皇のお見舞いの記帳に来た」と言いました。その後もう1回、令嬢だけで訪問しました。御所ではこの時、情報漏洩を恐れ女官長がお茶を運びました。ところがこの話はその後、突然頓挫してしまいました。令嬢は一貫してお断りしたそうですが、それが決定的な理由ではありません。令嬢の曾祖父は軍人で、日本統治下の朝鮮半島で反日運動の弾圧に関与していたと指摘されました。この経歴をめぐり「日韓関係が持たない」という声が上がって、立ち消えになったそうです。

■今度はおじさんに逮捕歴

その後、平成になってから側近の一人が「松永さん、ちょっと宿題があります。お妃の選定に関係あるらしい3つのキーワードを聞きました。これが何を意味するか解いてみてください。解けなかったらこの話は忘れてください」と前置きして、2人の男性の名前と学習院大学の卒業年次の3つを言いました。この側近はまだ若くお妃選定には関係していません。3つのキーワードはたまたま聞いたのでしょう。当時はグーグルなんかなかったから3つを手掛かりに必死に調べるとある令嬢の名前が浮かび上がり、ネタ元に伝えました。ずばり候補に挙がっていた女性でした。ところが調べを進めると、この令嬢のおじさんの一人が有名な経済事件で東京地検特捜部に逮捕されていたことが分かりました。何とそのことを東宮のトップ以下幹部はだれも知りませんでした。逮捕は最高幹部立件の証拠固めのようなところがあり、おじさんは最終的には不起訴になりましたが、私はその情報を人を介して東宮職幹部に伝えました。彼らは胸をなでおろしたと思います。

皇太子は独身で通すわけにはいかない宿命があります。それも、国民の大喝采を浴びるような結婚を期待されていました。雅子さまとの結婚が決まるまでのお話は、悪趣味ととらえる方もいらっしゃるかもしれませんが、結婚の困難さを分かっていたからこそご紹介しました。このように皇族の結婚は困難に満ちていて、それは眞子さんの問題の以前からあったことで、これからも間違いなく起こることだと思います。

8、皇室を体感できる場所



迎賓館赤坂離宮。明治42年建設。日本唯一のネオ・バロック様式による宮殿建築物で国宝。(出典・内閣府迎賓館ウェブサイト)



迎賓館赤坂離宮の和風別館「游心亭」。昭和49年建設。東宮御所を設計した建築家・谷口吉郎の設計。(出典・内閣府迎賓館ウェブサイト)

■親しまれるよう力尽くす

その時ふと、皇居の宮殿「松の間」の「玉座」を思い出しました。宮内庁担当になったばかりのころ、新人記者だけの宮殿見学会があり、元警察担当のがさつな記者が「記念に座ってみようか」というと、職員があわてて「ダメです。この椅子は陛下もお座りにならずに、前にお立ちになるだけです」と制止しました。背もたれがとても高いこの椅子。誰も座らない巨大な椅子。等身大以上の皇室で、生身の人間として、そこに生きていくのはたやすいことではありません。美智子皇后が一時言葉を失われたり、雅子さまの心身の不調が生じたりしたのもそれと関係あるかもしれません。そんな中、平成の天皇、皇后両陛下は天皇制を維持し、親しまれるように力を尽くしてきました。両陛下を支える側近や官僚の中には、困難を知恵で乗り越えようとする人もいて魅力的でした。社会部長が言った「死ぬ時思い出すような特ダネ」は取れませんでした。宮内庁での体験は得難いものだったように思います。

■「等身大」を上回る天皇制

東京・赤坂の「迎賓館赤坂離宮」は皇室を体感できる場所です。賓客が来た時に接待する和風別館というのがあり、先日、中を見せてもらったのですが、初めてなのにかつて来たことがあるように思いました。明るく清楚で、宮内庁を担当していたころ行った東宮御所に感じがそっくり。それもそのはず、ここは東宮御所と同じ谷口吉郎の設計だったのです。東宮御所は両陛下が結婚して子供を育てられ、今は「仙洞御所」となり、お2人はここに住んでいらっしゃいます。

本館のほうは見事な天井画や壁画、シャンデリアのある大広間に圧倒されます。私が行った時、見学者の女性が鋭い質問をしました「天井は高く、ドアも大きいのに、ドアのノブが普通より随分低い位置についているのはなぜですか」。係の人は「部屋をより大きく見せるためなんです」と説明しました。ここでは、巨大さを誇る宮殿に比べて人間は小さく見えます。天皇も皇族も巨大な器の中で相当背伸びをしなければいけないのかもしれない。天皇制というのは人間の身丈をはるかに超える制度ではないかと考えました

■近くて遠かったトイレ 両陛下が地方にお出かけの時、飛行機に同乗しました。真ん中がカーテンで仕切られていて、前に両陛下と側近、後ろに宮内記者会の記者が座りました。トイレは前にしかありません。側近は「みなさん、遠慮せずに前のトイレを使ってくださいね」と言いました。離陸するとたちまちトイレに行きたくなりました。でも、両陛下の横を通る時、どうぞ挨拶をすべきかなどウジウジ考え、思い切りがつかえません。記者なので、ここは必要がなくてもお二人を見に行くぐらいの好奇心が必要なのでしょうが、小さな「菊のカーテン」をどうしても破れません。目的地の空港に着くやいなや、トイレに駆け込みました。トイレには記者会のほぼ全員がいました。

9、事件取材の現場で

■「サリン検出を早く打て！」

事件取材は随分因業な仕事だと思いました。オウム真理教事件の捜査指揮をとった寺尾正大・警視庁捜査一課長は、大仏のような顔をしていて目が決して笑いません。そして余計なことは一切話さずとりつく島がありませんでした。「ミスター一課」と言われていましたが、記者は「ミスター黙秘権」と呼んでいました。地下鉄サリン事件で、東京中が騒然とした朝、彼は記者を集め「サリンが検出された」と発表しました。みんなが質問を浴びせかけると、「質問なんかいい。すぐに打て！」と一喝しました。彼の判断は正しい。サリン検出は、救急患者をかかえる都内の医師に一瞬でも早く伝えなければならない情報でしたから。

■とにかく怖かった吉永祐介

ロッキード事件は私が入社した 1976 年に発覚しました。指揮した吉永祐介検事は私が今まで見た中で一番怖い人間です。牛乳瓶の底のような眼鏡をかけ、その中の細い目が光ります。若い日に、他社の記者たちの後について彼の部屋に入り、話を聞いていると「質問もしないのにここにいる奴がいる」と怒られました。怖い人三原則というのがあります。①怖い人は自分のことを怖い人と思っていない②怖い人でも 60 歳を過ぎると怖さが減る③本当に怖い人は笑うとなお怖い。プーチンや習近平の笑顔を思い浮かべてください。

■闇将軍 VS 検察の激しい攻防

ロッキード事件は 2 月に米国で発覚して 7 月には田中角栄元首相を逮捕。でも起訴してからがもっと大変でした。闇将軍として政界に君臨する田中は血みどろになって戦いました。検察は法廷で、田中の秘書の榎本敏夫が 4 回に分けて都内で賄賂 5 億円を受け取ったと主張しましたが、田中側は榎本の運転手が付けていた運行記録ノートを隠し玉として出してきました。検察側が知らなかった証拠で、運行記録は検察側の描く授受の場所、時間と矛盾します。授受が崩れれば角栄は無罪です。検察大ピンチです。世論が「検察は大丈夫か」と揺れます。

■世論変えさせたハチの一刺し

ここを出してきたのが榎本の元妻、三恵子さんでした。凜とした長身の彼女は、法廷で榎本がロッキード社からのカネの受領を認めていたと証言し「ハチは一度刺すと自分も死ぬというのが、同じ気持ちです」と言いました。後に吉永さんが検事総長になった時、彼はこういいました。「あの時は新聞がオニの首をとったように検察をたたき始めた。あの証人は論調を変えるために出した。案の定マスコミは飛びついた。でも君は刑事訴訟法を読んだことがあるか。本来、榎本被告の旧親族である三恵子証言の証拠能力は低い。事実、判決では全く触れられていない。やめておけという人もいた。でもそんなこと承知でやった」。彼は、法廷や刑事訴訟法ではなく「世論」という大きな魔物を見据えていたのです。

■警察、検察が対立したオウム事件

警察が運動神経や直感を得意としているのに対し、検察は知略です。その両者が対立したのがオウム真理教事件でした。地下鉄サリン事件があり社会がオウムに怯えていた 1995 年の春先、私は検事総長になっていた吉永さんの部屋を訪れました。彼は 60 を過ぎており、さっき言った「怖い人三原則」通り、一時の怖さは和らいでしました。彼は「これは歴史的事件だ。中途半端な罪名では着手しない。堂々と殺人で麻原彰晃を逮捕する」と言いました。一方、警視庁はすぐに立証が可能な殺人予備で麻原や教

■生き馬の目を抜く 関西地方の検察での話です。若い記者が特ダネを書き、夕刊締め切り直前に、地検の次席検事に最終的な確認を取ろうとエレベーターに乗り込みました。ドアが閉まる間際、他社の老練な記者がエレベーターに乗り込んできました。小柄で精悍(せいけん)な老記者は、若い記者の顔つきがいつもと違うのに気づき、とっさに言いました。「次席のとこ行くんか。あの話やる」。若い記者は「はい」と言っただけで済みました。「ちようどいい。わしもその件や。一緒に入る」。若い記者は次席に自分の記事の概要を言い、確認を取って夕刊に入れましたが、老記者の社の夕刊にも同じ特ダネが出ました。老記者は、それまで全く知らなかった特ダネを「同着」で自分の新聞に入れることができたのです。記者の世界は尋常ではありません。

団幹部の身柄を取ろうと考えていました。殺人予備は殺人のために凶器を準備したことを裏付ければ立件できます。しかしここは当然、検事総長である吉永さんの意見が通りました。

後日、警視庁の寺尾捜査一課長は私にこう話しました。「殺人予備でやるという方針が総長のところまで行って反対されたみたいだ。殺人予備だったら教団幹部の村井秀夫が惨殺される前に逮捕できた。吉永さんはでっかい経済事件をじっくりやる方だから、現場の捜査のやり方なんか分からないんじゃないかな」。オウム事件は殺すか殺されるかの戦争のようなものでした。オウム裁判は真相が曖昧なまま終わってしまいました。キーパーソンの村井が生きていたら事件の真相はもっと分かったかもしれません。ここは、やはり運動神経の警察の判断が正しかったと思います。

■戦後最悪の警察不祥事スクープ

2000年に「神奈川県警不祥事」のスクープで新聞協会賞をいただきました。後輩が探り出した神奈川県警の集団リンチ事件をデスクとして配信すると、県警は報道内容の重要部分を否定しました。でもそれはうそでした。さらにうその上塗りを重ね、記者会見で攻撃され県警は崩壊していきました。警官の覚せい剤所持、使用案件を県警ぐるみで隠蔽していたことも分かり、本部長以下幹部がみんな起訴されるという戦後最悪の警察不祥事になりました。

■「おかげで警察は救われた」

事件のあと警察庁の首脳が「神奈川県警不祥事報道のおかげで警察は救われた」と言いました。日本の警察はそれまで不祥事はばれない限り隠すという方針をとっていましたが、この後、原則公開に大転換しました。そのような場に関与できたことは得難い体験でした。私は日本新聞協会会長の渡邊恒雄さんから賞状をいただき、そのスピーチで「神奈川県警は隠蔽をしたけれど、組織と隠蔽は付き物で、それは役所でも民間企業でもマスメディアでもありうる」ということも話しました。後日作られた会社の社史に私のスピーチが掲載されましたが、「マスメディアでも隠蔽はありうる」という部分はカットされていました。典型的な情報隠蔽ですね。

■記者の醍醐味味わった

記者、編集者の仕事を通じて一度も、上から「この記事はやめておけ」と言われたことも、私が同様なことを後輩に言ったこともありません。これは誇りにしていますし、時事通信には感謝しています。さまざまな人に会え、いろんな場面に遭遇できたのも記者になったからこそだと思います。47年前、この仕事に入るきっかけを作ってくれた人が「名刺1枚でどんな偉い人にも会える。面白い仕事だぞ」とおっしゃいました。今になってつくづくその意味がよく分かります。両陛下、側近、警察官、検察官、記者…。ある立場にある人はそれぞれの困難や不都合を抱え、知力を尽くして戦っている。そういう人々の警咳（けいがい）に接することができたのは実にありがたいことでした。

※本講演は基本的に私の取材メモに基づきますが、明示した引用文献を除き、一部で下記を参照しました。高谷朝子「宮中賢所物語」、宮原安春「祈り 美智子皇后」、植田いつ子「皇后美智子様の素顔」（「文藝春秋」1990年9月号）

【質疑応答】

Q 朝日新聞は慰安婦報道や沖縄のサンゴ礁報道などの問題で、社長までもが何人も引責辞任しました。普通の会社ならとっくに淘汰されているはずですが。また、民主党が政権を取る前、マスコミの報道は政権交代一色だったように思えます。このようなマスコミを見ていると、日本における報道の品質が低いように思うのですが。

A 新聞社などの経済力が落ちてきて、人が足りなくなっていることも、そうした問題の一因かと思えます。恣意的な記事については、まったくないとは言えませんが、大半の記者は事実を探り出して書こうと真剣に取材しています。どこかの勢力を持ち上げようとか、逆にたたいてやろうとか決めてから動くようなことは、そんなに多くないと思います。私も日々新聞各紙を読んでいて、あらかじめ意図をもって書いているなど思える記事はほとんど目にしません。ただ、新聞の質について心配している人もいて、ある最高裁の人は「新聞社の経済的基盤が弱くなって記者の質が落ちてくると、最高裁判断などが正確に伝えられるかどうか心配だ」と話していました。

Q 企業の若い人がだんだん現場に出なくなり、パソコンの前に座っていることが多くなっているようです。新聞社においても人手不足もあり、なかなか現場に足を運ばないで、取材力が劣化しているようなことはありますか。

A 若いころ、夕刊のお天気原稿を書けと言われた記者が、外に行かないでネットで天気を調べて書いていましたが、とんでもないですよ。ただ、ネットが絶対だめということではなくて、ネットだけで特ダネを取ったという話も聞きます。若い人はそういうのにたけていますから、そういう方法を端緒にして取材を広げていくというスタイルもあってしかるべきでしょう。もちろん基本的には、人と会って話を聞き、その人の表情などから真意を探っていくべきです。

松永努先生のプロフィール

- 1954年（昭和29年）静岡県静岡市生まれ
 - 1976年（昭和51年）明治学院大学卒
時事通信社入社、社会部に配属
 - 1988年（昭和63年）宮内庁担当
 - 1990年（平成2年）マニラ特派員
 - 2000年（平成12年）日本新聞協会賞（代表）受賞
 - 2001年（平成13年）岡山支局長
 - 2003年（平成15年）社会部長
 - 2007年（平成19年）名古屋支社長
 - 2011年（平成23年）業務局長
 - 2012年（平成24年）取締役
 - 2015年（平成27年）時事通信出版局代表取締役社長
 - 2019年（平成31年）同 退任
 - 2020年（令和2年）中日本エクシスアドバイザー
 - 2021年（令和3年）フリー編集者として月刊誌編集
- 著書 『マニラ不思議物語』（論創社）
共著 『世界王室マップ』（時事通信社、新潮社）
『現代フィリピンを知るための65章』（明石書店）